家畜×自然体験
ー里山体験プログラムの企画と実践からみえたことー

森と木のエンジニア科林産業コース　駒田一葉

01.研究のきっかけ

祖父母へのあこがれ

三重県津市の里山に暮らす
私の祖父母は山や田畑を管理し、生き物や作物の恵みをいただいて暮らしている。
そんな祖父母に憧れて、多様な技術を生かした自分たちで創っていく里山の暮らしをしていきたいと思うように。

なんでにわとり？

・卵から孵ったヒヨコが鶏になり、
また卵を産みだすまで約６か月
➡いのちのサイクルが
他の家畜より短い

・昔から里山の暮らしには
家畜の存在が不可欠だった
鶏は庭の鳥と呼ばれるほど
人と身近な存在だった

・現代においても、卵やお肉、堆肥…
思っている以上に鶏は身近な存在

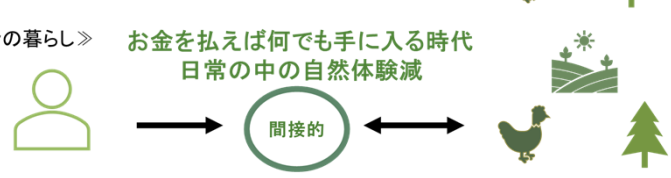
・飼育しやすく、食と精通する鶏は
里山の暮らし、循環する暮らしを
子供たちがわかりやすく
実感しやすい存在

≪少し前までの暮らし≫

日常の中に多くの要素・自然体験

≪今の暮らし≫

お金を払えば何でも手に入る時代
日常の中の自然体験減



多様な技術と知恵を生かした、自分たちで創っていく里山の暮らしに目を向けたら見えてくるものがあるかも！

創る暮らしを実践し、人に伝えたい！
でも、１人だけでは難しい

酒向一旭さん　と出会った。
美濃加茂市蜂屋在住。有機農家。猟師。
元美濃加茂市職員。
“やまのはたへ”という屋号で里山の暮らしや地域コミュニティの維持、里山技術を通して子どもたちへ『森学』と題し、自然体験の場の提供をしている。

酒向さんと一緒に
里山体験プログラムを企画・運営することに

02.ひよこプログラムの実践

『森学LIFE』と題し、子供たち向けの家畜を介した年間里山体験プログラムを実施。

森学LIFEのテーマ
自然の成長量を人の知恵や技術で
有効的に活用してきた
里山の暮らし。
自然の中にある人の暮らしを体験し、
生きることと向き合う。

体験価値として大きなウェイトを占める
“屠畜”“調理”“食べる”
については、時間をかけて丁寧に実施
→食を通して暮らしを考えるきっかけに

03.まとめ

森学参加者へのアンケート

卵を孵化させてひよこを育てるのを**またやってみたい**
ひよこが産まれるところをみたことが心に残った。

・子供が森学を学ぶことで**現代の生活がいかに楽でシステマチックになっているか**を考えさせられた。
・ひよこを孵し育てる事で私自身学びは多く**循環型の生活**が家庭に入ってきて今後さらに多くの出来事を経験することで自分としても家族としても**豊かな暮らしに繋がると思っています。**

考察

1. 現代社会において、
里山的な暮らしを求めている人が一定数いる。
2. 『ひよこプログラム』は
参加者の意識の変化、
行動変容を促すのに効果的
3. 今後、ひよこプログラムを
改善して発展させられそう

今後の展望

- 捌いて食べる会の実施
いのちのサイクルを１周
- 就職先の自然学校で
役立てる
- 里山や自然の魅力を
伝える**現代版百姓**に
なる！